

# 親子間視線コミュニケーションは乳児の語彙獲得を予測するのか —親の自閉症傾向の観点より—

養老 美菜

## 【序論】

親子間での視線を介したコミュニケーションは、乳児の語彙獲得の起点となる。前言語期の乳児は語彙を獲得するにあたり、「大人が発した言語ラベル」と「言語ラベルが指し示す対象」の対応関係を学習する必要があるが、日常での乳児の生活環境には多くの物体であふれており、「ラベリング(大人が言語ラベリングを発すること)の対象となり得る事象が複数存在し、言語ラベルをどの事象と対応づけたらよいか不明確である」という問題が生じる。親子間での視線を介したコミュニケーションは、こういった乳児の語彙獲得に関する問題を解決するために重要であるとされている。特に、「親が乳児の顔を注視して、乳児の視線方向・乳児が注視している対象物を把握する」といった視線を介したコミュニケーションに、親のラベリング行為が加わることで、乳児にとって言語ラベルと物体との対応関係が明確になるといわれている(e.g., Abney et al., 2020; Yu et al., 2019)。Abney et al. (2020)は、親子間の物体遊び場面における親(parent)・乳児(infant)それぞれの注視行動に関して、「物体・相手の顔の両方(triadic)を注視しているか」・「物体のみ(object)を注視しているか」・「相手の顔のみ(face)を注視しているか」を評価し、親子双方における注視行動の時間的協調を「協調的注意」(coordinated attention)と定義した。そして、親子それぞれの注視行動の差異に応じて、協調的注意を複数のカテゴリーに定義した。その結果、「親が物体・乳児の顔の両方を注視して、乳児が物体のみを注視する」といった協調的注意のカテゴリー「parent: triadic & infant: object」が、乳児の後の語彙獲得に寄与することが判明した。このように、「親が乳児の顔・乳児の注視対象を観察する」といった視線を介したコミュニケーションが、乳児の語彙獲得に重要な役割を果たすと論じられてきた。

相互作用場面での他者の顔を注視する行動、および他者との視線を介したコミュニケーションに影響を与える要因として、個人の自閉症傾向がある。成人同士の相互作用場面においては個人の自閉症傾向と注視行動との間に関連があり、先行研究(Chen & Yoon, 2011)は、個人の自閉症傾向が強くなるにつれて、他者の顔を注視する行動が減少することを明らかにしている。しかし、親子間の相互作用場面において、親の自閉症傾向が親の注視行動に影響を与えるか、また、親の自閉症傾向によって親子間の視線を介したコミュニケーションが変容し、以後の乳児の語彙獲得に影響を与えるかについては明らかになっていない。

本研究では、以上の2点を検討するにあたって、親の自閉症傾向が親および乳児の注視行動に与える影響、ならびに、親の自閉症傾向が、親子間の視線を介したコミュニケーションを通じて乳児の語彙獲得に与える影響を調べた。具体的には、(1)親の自閉症傾向と、親子間相互作用における親子それぞれの注視行動との関連、(2)親の自閉症傾向と、親子間で発生した協調的注意との関連、(3)親子の協調的注意と、乳児が後に獲得した語彙数との関連、(4)親の自閉症傾向と乳児の語彙獲得との関連の4点を調査した。もし親の自閉症傾向と乳児の語彙獲得との関連がみられた場合は、(5)親の自閉症傾向が、協調的注意を介して乳児の語彙獲得に与える影響について、媒介分析を用いて調査することとした。

## 【方法】

本研究では、12カ月児(実験室調査時点)とその親の39組を分析対象とした。親を対象に、成人用

Autism-Spectrum Quotient(Baron-Cohen et al., 2001)を用いた質問紙調査を実施し、参加者ごとの質問紙の得点を、親の自閉症傾向の指標とした。また、日常生活での物体遊び場面を模した環境で実験室調査を行い、親が物体の言語ラベルを発した(ラベリングした)タイミングでの、親および乳児の注視行動、具体的には「親が乳児の顔を注視しているか」・「親がラベリングの対象物を注視しているか」・「乳児が親の顔を注視しているか」・「乳児がラベリングの対象物を注視しているか」の4 つについて評価を行った。さらに、ラベリング時の親および乳児の注視行動をもとに、協調的注意を複数のカテゴリーに分類した。具体的には、親(caregiver)と乳児(infant)それぞれの注視行動に関して、「ラベリングの対象物・相手の顔の両方を注視している」場合は triadic, 「ラベリングの対象物のみを注視している」場合は target, 「相手の顔のみを注視している」場合は face と評価し、caregiver・infant それぞれの triadic・target・face の組み合わせに応じて協調的注意の分類を行った。加えて、実験室調査時点とその3カ月後の2時点で、the MacArthur Communicative Development Inventories「Words and Gestures」(Fenson et al., 1993)を用いた質問紙調査を実施し、その2時点における質問紙の得点の差分を、乳児の語彙獲得の指標とした。

## 【結果】

まず、(1)親の自閉症傾向と親の注視行動との関連を調べたところ、親の自閉症傾向が強くなるにつれて、親が乳児の顔を注視する行動の生起割合が減少していた。次に、(2)親の自閉症傾向と協調的注意との関連を調べたところ、親の自閉症傾向が強くなるほど、協調的注意のうち「caregiver: target & infant: target」のカテゴリーについて、その生起割合が増加していた。また、(3)協調的注意と乳児の語彙獲得との関連を調べたところ、協調的注意の各種カテゴリーのうち、乳児の語彙獲得と関連するものはなかった。最後に、(4)親の自閉症傾向と乳児の語彙獲得との関連がみられなかったことから、(5)親の自閉症傾向が協調的注意を介して乳児の語彙獲得に与える影響については、媒介分析を実施しなかった。

## 【考察】

個人(親)の自閉症傾向は、親子間相互作用場面において親が乳児の顔を注視する行動に影響を与えることが明らかとなった。また、親の自閉症傾向によって、親子間の視線を介したコミュニケーションは変容したものの、その変容は乳児の語彙獲得に影響を与えるものではなかった。親の自閉症傾向・視線を介したコミュニケーション・乳児の語彙獲得の3点について関連がみられなかった理由として、乳児の語彙獲得に、本研究では未測定の「視線を介したコミュニケーション以外の要因」がかかわっていた可能性がある。先行研究では、親子間の注視行動の時間的協調を調べた協調的注意以外に、様々な乳児・親の行動が乳児の語彙獲得につながることを示している。たとえば、「乳児がラベリングの対象物を把持する行為」・「ラベリングの対象物へ顔を近づけて注視する行為」の2つが組み合わせることで、乳児の視野内にラベリングの対象物が占める割合を増やし、言語ラベルとラベリング対象物との対応関係の学習を容易にすると論じる知見がある(Schroer & Yu, 2022)。他にも、食事場面・本の読み聞かせ場面などの文脈が、乳児の語彙獲得にとって重要とする知見も存在する(Yont et al., 2003 など)。今後の研究では、複数の要因の相互的関連が乳児の語彙獲得につながるかどうかを検討することが期待される。(比較発達心理学)